

## 修道院神学とマリア論

——アンセルムスからベルナルドウスへ——

矢内義顕

### 序

「東西における男女論」というパネル・ディスカッションのテーマのもとで、筆者に与えられた課題は、中世キリスト教の修道院における男性論ないし女性論に関する提題である。

アメリカの教義史家J・ペリカン (Jaroslav Pelikan 1923-)

が見事に描き出したように<sup>①</sup>、西欧の文化には二人の歴史的な男女、すなわち、イエスとマリアの像が刻印されている。紀元前一世紀に、パレスチナ北部の一地方で、ユダヤ人の家庭に生まれた二人の男女、ミリアム・マリア、ヨシュア・イエスが、後の思想、文学、芸術などの文化史においてこれほどの強い影響を及ぼすとは誰が想像し得たであろう。そしてマリアの像が最も強く刻印されているのが中世キリスト教である。

本提題では、一一—一二世紀の修道院神学者におけるマリア論を取り上げることにより、中世の女性像の一端を紹介する。中世後期がマリア論の最盛期であるとすれば、この時代はマリア論の確立期であり、それは修道院を中心になされた。<sup>②</sup>

#### 1. 「修道院神学」

最初に「修道院神学」という概念について簡単に述べておこう。<sup>③</sup>この概念を提唱したのは、中世修道院文化研究の泰斗ジャン・ルクレーール (Jean Leclercq 1911-93) である。彼は、一一世紀後半から活発化する都市の司教座聖堂付属学校や世俗の学校において発展したスコラ学に対し、修道院学校で営まれていた学問の独自性に注目し、それを「修道院神学」(theologie monastique) と名づけた。

スコラ学は、アリストテレス・ボエティウスの論理学を積極的に活用して様々な問題を討論し、解答・解決を与えることによつて、思弁的、抽象的、体系的神学を構築し、その典型は一二世紀のトマス・アクィナスの神学に見られる。これに対し、修道院神学はその基礎を観想的な修道生活にもっている。

五二九年モンテ・カッシーノに修道院を立てたベネディクトゥスが修道士のために著わした『戒律』(Regula)は、後の西欧ラテン世界の修道生活に基礎を与える。ここでは、聖務日課(officium divinum)と「呼ばれる日に八回行われる共同の祈禱、そして読書(lectio divina)ないし瞑想と労働を適切に配分することにより、修道士の一日のスケジュールが定められている(48章)。中心となるのは聖務日課であり、この祈りの生活、典礼の生活を充実させるために、ラテン語の学習、聖書・教父の著作の読書、瞑想、研究がなされる。そこから生み出された信仰の理解としての神学は、聖書の記述とアウグスティヌスなどの教父に従い、救済史的枠組の中で構築され、さらに神学的思索は単に抽象的思索にとどまらず、祈り、瞑想、読書をとおして体験され、修道生活において実践されることが求められたのである。この修道院神学の頂点に立つのがカンタベリーのアンセルムス(Anselmus Cantuariensis 1033/34-1109)とクルレルヴォーのベルナルドゥス(Bernardus Claraevallensis 1090-1153)である。

## 2. カンタベリーのアンセルムス

——世界の和解者マリア  
(mundi reconciliatrix)

カンタベリーのアンセルムスが、『プロスロギオン』(Proslogion)の「神の存在証明」と「神はなぜ人間となられたか」(Cur deus homo)の贖罪論によつて哲学と神学に与えた影響は端倪すべからざるものであるが、その『祈禱集』(Orations)によつて中世におけるマリアへの信心の伝統に与えた影響もまた看過できない。彼は、個人の熱烈な感情・情緒と信仰・敬虔を見事な文体で表現し、中世の靈性に新しい世界を切り開く十九編の『祈禱』を残したが、このうち三編がマリアへの執り成しを願う祈りである。これらは、アンセルムスが修道院長を務めるベック修道院の一修道士の執拗な願いによつて、一〇七二—七五年に執筆され、彼の著作活動の最初期に属する作品である。<sup>4)</sup>

アンセルムスはその祈りにおいて、「聖母マリア、聖なるものたちの中にあつて、神について聖なる方、称賛すべき処女なる母、愛すべき豊饒の処女、あなたは至高の御子を懐妊し、墮落した人類の救い主を生み出された」と述べ、マリアを救済史の中に正当に位置づける。彼はマリアを神について最も聖なる者と呼ぶが、それは、彼女が神の子を生んだ母(Theotocos)であるからに他ならない。彼女の役割はキリストの出産にとどまるものではない。

「万人の贖罪の宮殿、普遍的和解の原因、万人の命と救いの器、神殿」<sup>(6)</sup>としてキリストの贖罪の業にも協働する。その働きは、「彼女を通して、諸元素は新たにされ、地獄は贖われ、悪魔はその足元に踏みつけられ、人間は救われ、天使の数は補充される」と述べられるように、宇宙論的拡がりをもっている。そして、一箇所だが、アンセルムスはマリアを「世界の和解者」(mundi reconciliatrix)と呼ぶ。神と世界との和解者 (reconciliator) という名称はキリストのみにふさわしいものであるから、キリストと相並ぶ名称をマリアに与えたことは、きわめて大胆な試みと言ふべきであろう。彼はこれによって救済史におけるマリアの比類のない役割を表現したのである。

しかし、次に述べる「無原罪の御やどり」、すなわち、マリアが彼女の母(アンナ)に懐胎されたその発端において、神の特別な恩恵と特典によって原罪から清められたとする説については、アンセルムスは「神はなぜ人間となられたか」において、マリアはキリストの生誕以前に彼の十字架の死による救いを信じたがゆえに、キリストによって原罪から清められたと述べ、否定的立場を示している。<sup>(9)</sup>

彼の『祈禱集』は、修道院のみならず、敬虔な生活を送る貴族の女性たちによっても愛読され、中世全般を通じてその読者は絶えることがなかった。さらに、この『祈禱集』には、彼の名を冠した偽作が数多く追加され、その数は七十五編にまでなる。その

中にはマリアへの祈りも十八編含まれている。アンセルムスがマリアの信心の伝統に果たした役割は大きい。

### 3. カンタベリーのエアドメルス ——無原罪の御やどり (conceptio immaculata)

カンタベリーのエアドメルス (Eadmerus Cantuariensis ca. 1060-1126) は、カンタベリー大司教となったアンセルムスの秘書を務め、彼の死後にアンセルムス伝および英国史を執筆し、伝記作者・歴史家として知られているが、晩年(一一二五年頃)に執筆された『聖母マリアの御やどりについて』(De conceptione sanctae Mariae)は、マリアの「無原罪の御やどり」を最初に明確に提示した神学的著作として重要である。本書は中世を通じてアンセルムスの著作として流布したが、今世紀になってエアドメルスの著作であることが確定された。<sup>(10)</sup>

さて、エアドメルスは、本書執筆の強い動機として、久しくとだえていた「聖母マリアの御やどりを祝う祝日」が英国において復活したことを冒頭で述べている。東方教会で行われてきたこの慣習は、一一世紀初頭、ギリシア人修道士がローマ近郊に修道院を建てたことによって西方に入り、アングロ・サクソン時代の英国にも導入された。しかし、ノルマン征服後、ランフランクス、アンセルムスの大司教時代の英国ではそれが廃止されていたのである。しかし、アンセルムスの死後、再びこの祝日が再開され、

かつての慣習に限りない愛着を抱いたエアドメルスは、「この世に救いが現れたその始源」すなわち、マリアの懐胎についての考察を思い立ったのである。<sup>11)</sup> 論証にあたって、彼が拠る所としたのは聖書の言葉と教会の典礼、そして何よりもマリアへの純朴な信仰である。<sup>12)</sup> この著作において、彼は師アンセルムスの見解を離れる。彼はマリアを万人の贖罪のための宮殿と呼び、その宮殿の基礎工事をマリアの懐胎の発端とみなす。この宮殿は聖霊の働きによって建てられ、神の知恵（キリスト）が住むことになる場所である以上、その基礎も建物にふさわしいものでなければならず、当然、罪の汚れに染まっていたはならないはずである、と彼は考える。<sup>13)</sup> 墮落以降の人類の内において、マリアだけは、キリストの十字架による贖罪によらず、聖霊によって原罪から清められた唯一の例外となり、彼女に卓越した特権が与えられるのである。

#### 4. クレルヴオーのベルナルドゥス

——修道生活の模範としてのマリア  
(*Imitatio Mariae*)

一二世紀シトー会の生んだ最大の神学者クレルヴオーのベルナルドゥスは、中世の神学者の中にあつてこの上なくマリアを賛美した一人である。その影響は中世全般を通じて持続し、ダンテが『神曲』においてマリアについて歌うとき、その源泉はベルナルドゥスであった。

彼は「無原罪の御やどり」については、この祝日に関するリヨン大聖堂の参事会員たちの問い合はせに答えて、否定的見解を述べる。彼はマリアがキリストを懐胎したこと、マリアの母（伝承ではアンナ）がマリアを懐胎したこととはあくまで違うことを強調する。それは何よりも教会の信じていること（*quod Ecclesia sentit*）だからである。さらに、もしマリアが罪なくして懐胎されたとする、マリアに与えられた特権はその母に与えられることになるが、そうであるなら、マリアの母もまた罪なくして懐胎されねばならず、これを繰り返していくと、人祖アダムとエヴァにまで遡らなければならなくなる。当然、アダムとエヴァにおける原罪が否定されることになり、「無原罪の御やどり」は認められない、と言ふのである。<sup>14)</sup>

このように、彼は「無原罪の御やどり」については否定的立場をとったが、次に、彼がクレルヴオーの修道士のために語った講話『処女なる母を讃える』(*In laudibus Virginis Matris*)と『被昇天の八日間の主日説教』(*Dominica infra octavam assumptionis*)を主として取り上げ、彼のマリア論を見ていくことにする。<sup>15)</sup>

『処女なる母を讃える』は一〇二〇年から二五年にかけて、つまり彼の著作活動の初期に書かれ、『ルカ福音書』1章26—45節をテキストとした四つの講話からなる。『被昇天の八日間の主日説教』は、『ヨハネ黙示録』12章1節「また、天に大きなしるしが現

れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた」をテキストとした説教である。

この説教において、ベルナルドゥスは、マリアを義の太陽キリストと月である地上の教会を仲介する者 (mediatrix) と呼び、救いの歴史の中で彼女に卓越した地位を与える。この仲介者というマリアの呼称はすでに東方の神学においても見出されるが、西欧においてこれが広く受け入れられるのは一一―一二世紀のことであり、ベルナルドゥスの説教もそれを鮮明に物語っている。キリストの救いの業はそれ自体で十分なものではあるが、しかし、我々にとってはその墮落した人間本性を回復するためには両性が協働することの方がよりふさわしかったと彼は考える。女性としてその役割を担うのが、蛇の頭を砕くであろうと言われた(創3・15)「強い女」(mulier fortis 箴31:10) マリアである。彼女は、「救い主が到来した道」であり、「彼女を通して我々が救い主のもとへと上って行く道」でもあり、「唯一の仲介者(キリスト)への仲介者」執り成し手」として、人間とキリストとの間に立つ者である。<sup>(21)</sup>

彼女は執り成し手としての役割を担いながら、またその徳によって常に修道士の模範でもある。ベルナルドゥスは繰り返しまリアを模範とし、マリアに倣うことを強調する。

『処女なる母を讃える』の第一講話においては、マリアの謙遜 (humilitas) と処女性・童貞性 (virginitas) に倣うように説き、

それに倣うことができないのであれば、謙遜に倣うように勧めます。<sup>(22)</sup> また第二講話では海の星 (stella maris) マリアの生活の模範に倣うようにと説かれる。<sup>(23)</sup>

『被昇天の八日間の主日説教』では彼女の冠の十二の星に、十二の特権を教え、それを天の特権、体の特権、心の特権に分け、おのおのをさらに四つに分ける。最初の二つはここでは省略する。心の特権として挙げられるのが柔和 (mansuetudo) 謙遜 (humilitas) 信仰 (credulitas) そして心の殉教 (martyrium cordis) である。<sup>(24)</sup> ベルナルドゥスはこれらのマリアの徳について述べるにあたり、なによりもこれらの徳を模倣すべきことを説く。そして、ここでも謙遜こそすべてのキリスト者、とりわけ修道士が倣うべき徳であると述べている。<sup>(25)</sup>

言うまでもなく、「謙遜」の実践はベネディクトゥスの『戒律』第七章で十二段階に分けて詳しく述べられていることであり、マシエルムスは、彼の弟子アレクサンデルが筆記した『語録』(Dicitur Anselmi) において、この謙遜の十二段階を彼独自の観点から七段階に再編成し、より論理的、内面的な説明を試みている。そして、ベルナルドゥスの最初の著作も、「戒律」第七章の解説として書かれた「謙遜と傲慢の諸段階について」(Liber de gradibus humilitatis et superbia) である。彼はその謙遜の模範としてマリアを位置づけているのである。

最後に「心の殉教」について触れておこう。「心の殉教」とは

キリストの受難を心において共に苦しみ、キリストの肉体の死を心において共に味わうことである。キリストの受難を共に苦しむこと (compassio) を強調するのは一二世紀の信心の大きな特徴であり、ベルナルドゥスはその典型をマリアに見出しているのである。

## 結 語

以上、一―一二世紀における三人の修道院神学者たちを取り上げ、おのおののマリア論について簡単に見てきた。彼らのマリア論が、修道院における祈りと瞑想の生活の中から生み出されたことは言うまでもない。そして、本稿ではその関連を詳しく述べることにはできなかったが、このマリアへの強い関心は、キリストの十字架による贖罪、人性、地上の生涯への強い関心の現れでもあった。キリストの救いの業に関する神学的思索が、同時に、救いの歴史におけるマリアの役割への神学的思索を呼び起こしたのである。さらに、その神学的思索は、単なる思索にとどまらず、修道生活における謙遜の実践をおして、キリストに倣うこと、マリアに倣うことを求めている。彼らはマリアの刻印を強く刻みつけたのである。

(一) *Jesus Through the Centuries. His Place in the History of Cul-*

*ture.* Yale University Press 1985 (『イエスの像の二千年』小田垣雅也訳、講談社学術文庫、一九九八年) および *Mary Through the Centuries. Her Place in the History of Culture.* Yale University Press 1996 (『聖母マリヤ』関口篤訳、青土社、一九九八年)。

(2) トリン論の教義史に関するものは M. Schmans, A. Grillmeier, L. Scheffczyk, M. Seybold (Hgg.), *Handbuch der Dogmengeschichte*, Bd. III, Fasc. 4: Georg Söll, *Marilogie*, Freiburg im Breisgau 1978 が包括的である。なお、今日のマリエニスト神学は「マリア論」に関するも様々な問題点を投げかけているが、これについては、岡野治子「マリア論とマリエニスト神学」『宗教研究』第六三巻二八〇号 pp.49-74を参照。

(3) マリア学と修道院神学については、中世思想原典集成7『初期スコラ学』古田暁監修、平凡社、一九九六年 pp.8-25の解説、文献および同集成10『修道院神学』矢内義頭監修、平凡社、一九九七年 pp.8-28の解説、文献を参照された。

(4) Cf. *Epistula* 28. (マキヌトは、S. Anselmi *Canthariensis archiepiscopi Opera omnia. Ad fidem codicum recensuit Franciscus Salesius Schmitt, Stuttgart-Bad Cannstatt 1968* 以下を参照)

(5) *Oratio* V, 13, 4-6.

(6) *Oratio* VII, 20, 51-52.

(7) *Ibid.*, 21, 82-84.

(8) *Oratio* VI, 17, 55. Cf. R. W. Southern, *Saint Anselm: A Portrait in A Landscape* Cambridge 1990 pp. 108-09.

(9) *Car dans homo* II, 16, 119, 28-30 邦訳は『マニセルムス全集』吉田暁訳、聖文舎、一九八〇年所収。なお、「無原罪の御やぶ」の正式な教義決定は一八五四年である。cf. Denzinger-

Schömezer, *Enchiridion Symbolorum*, ed. 36 (Herder 1976),

2803.

- (10) ナキストル<sup>47</sup> *Eadmeri monachi Cantuariensis Tractatus de conceptione sanctae Mariae olim sancto Anselmo attributus nunc primum integer ad codicem fidem editus adiectis quibusdam documentis coetaneis a Herb. Thurston et Th. Slater, Freiburg im Breisgau 1904* (ナキストル<sup>48</sup> 邦訳は『聖母無原罪の御孕り論』(笹谷道雄訳、ドゥン・ホスロ社、一九五三年)および『聖母マリヤの御やどりたごころ』(矢内義顕訳、上掲『修道院神学』pp.69-98所収)がある。
- (11) *De conceptione sanctae Mariae*, 1.
- (12) *Ibid.*, 2,12.
- (13) *Ibid.*, 13.
- (14) *Epistula* 174, 7. (ナキストル<sup>49</sup> Bernhard von Clairvaux, *Sämtliche Werke* lateinisch/deutsch, I-VIII, Innsbruck 1990-2 (ナキ<sup>50</sup>)).
- (15) 邦訳には『処女なる母を讃える』(古川勲訳、あかし書房、一九八三年)がある。このほかに『主日・祝日説教集』(*Sermones per annum*)の中の『聖母マリヤの清めの祝日の説教』(*In purificatione Sanctae Mariae*)、『聖母被昇天の説教』(*In assumptione Beatae Mariae*)、『聖母マリヤの誕生の説教』(*In nativitate Beatae Mariae*)、なほマリヤの誕生について語られてゐる。
- (16) *Dominica infra octavam assumptionis*, 5.
- (17) *Ibid.*, 1.
- (18) *In laudibus Virginis Matris* II, 4.
- (19) *Ibid.*, II, 5.
- (20) *In adventu sermo*, II, 5.
- (21) *Dominica infra octavam assumptionis*, 2.
- (22) *In laudibus Virginis Matris* I, 5.
- (23) *Ibid.*, II, 17.
- (24) *Dominica infra octavam assumptionis*, 7.
- (25) *Ibid.*, 10.
- (26) *Ibid.*, 11.
- (27) *Ibid.*, 15.
- (28) Cf. C. Morris, *The Discovery of the Individual 1050-1200*. Harper & Row 1973 pp.139-44 (C・モリス『個人の発見 1050-1200年』吉田曉訳、日本基督教団出版局、一九八三年、三五一-六一頁)。なほ、中世に於ける「キリストの模倣」(imitatio Christi)に關しては、cf. G. Constable, 'The Ideal of the Imitation of Christ', in *Three Studies in Medieval Religions and Social Thought*, Cambridge 1995 pp.143-248.

(ヤベウ・ナキ<sup>51</sup>、中世思想) 早稲田大学助教授)